

もいわれている。日本の文化の多くは北漸性があつて、会津地方などへは、関東や越後地方から推移してきたようにいわれているが、もんべや、このふたはば手拭は、どうやら北の寒い地方の、ふろしきとか、ふろしきぼつちのような冠り物から、手拭を二筋ぬい合せて用いる工夫をこらしたのもかとも思われて、非常に便利でもあるし、美装からもよく、貴重な野良の冠り物である。

3、履きもの、雨具、防寒具など 大正の中頃から、最初は生ゴムよりのもので、冷えると固くなる、飴色よりのものであつたが、逐次改良されて、履物、特に雪国としての冬のはきものは、一変してしまつたといつてよい。わらじ、それにつまをかけたおそふきわらじ、これを小学生がはいて登校し、わらじ乾し場があつて、混雑したり、燃えたりした難渋さは、現在では想像さえできないほどである。げんべ、わらぐつ、わらの長靴の類はまだ近年までみられた。特に雪踏みさんだらの類は現在も用いられている。雪踏み人足などが出て、村端れから学校まで、雪踏みをしてくれた後につづいて、小学生は、けつと、まんとをかむつて、行列をつくつて登校した。この履物がほぼ全部ゴム長靴に変わつてきている。

野良にはいたあしだかぞうりは、あしなか、即ち足の半ばまでの履物の足半からでた名称であろうが、履物の最も古い形を残しているもので珍しい。この草履までゴム草履にならうとしている。

野良の雨具は、みの、かさであるが、すげ笠のほかに、陽をよけるあみ笠などが、現在もなお、ビニールの冠り物におされながらもなお相当用いられている。みのは藁細工として、わらしなどと共に自家製であつた。雨具としてばかりでなく、荷物を背負う背、肩当て用にもしていた。リヤカーが普及し、現在オート三輪車なども多くなつて、荷負いみので背負う風景も、殆ど野良から失われようとしている。それでも老婆などは、野良から、何か背に負わないと、申し訳ないように習慣づけられて、リヤカーの後から、背負うて帰る姿など見受けるのは、